

倉橋惣三との対話④

「森の幼稚園」という理想（その2）

浜口順子

（大学教員）

「森」という場所

「きつとあなたのお気に入ります」と、倉橋先生がシカゴのヘミングウェイ女史に紹介状をもらって出かけたのはドナー・グローブの幼稚園でした。二年余にわたる欧米視察の終盤、一九二一（大正十）年のことです。シカゴから汽車で一時間ほどの、「丘」やら「谷」やら「小川」という名のついた駅がいくつか続いた先の停車場で降り、少し歩いたところの森通り（グローブストリート）にある幼稚園でした。グローブは「森」という意味なのですね。

最近日本でも注目されている、現代版「森のようちえん」の本場、デンマークの保育風景を写真で見たことがあります。デンマークの森は比較的明るく、地面は平たく、自由に遊べるスペースが木々の間に広がっていて、大きな岩や切り株がアクセントのように点在するその「森」は、近隣の市民にも親しみのある場所だといえます。

日本の「森」はどうでしょうか。倉橋先生が園長（主事）を務めていた（今の）お茶の水女子大学附属幼稚園は、一九三二年に移築されて以来、今も建物は当時のまま残っており、森、川、

山、海、林、池というクラスの名前にちなんだ絵柄のステンドグラスが、各部屋の出入り口を飾っています。倉橋先生もきつと、このグラスをいつも見上げていらしたことでしょう。その「森の組」のステンドグラスには、平らな畑の向こうにこんもりと鎮守の森が描かれ、入り口には鳥居が見えます。日本の「森」は鎮守の森なんですね。静謐^{せいひつ}で、ちよつと薄暗く、神聖な印象があり、西洋の「森」とは少し違うような……。欧米を訪問されるより数年前、二十九歳の青年だった頃、先生が理想の幼稚園として思い描いた「森の幼稚園」も、神社の近くにあります。日本の森なのですね。

……風の温い午後など、先生が幼児たちを連れて、近所の八幡様へでも行かれようという時には、先生の身边は、二重三重と幼児たちにとり囲まれて、それはそれは大層な騒ぎです。（『倉橋惣三選集 第二巻』フレール館 一九六五年 p.85）

ドナー・グローブの幼稚園（森の幼稚園）を訪ねて

倉橋先生は、ドナー・グローブの幼稚園を訪ねてきつと、「森の幼稚園はここにあった、本当にあった」と思われたのでしょうか。

森の中の小径伝い、門もなければ、もとより標札もありません。これに相違ないとは思いますが、もし間違っただらという気づかいもあって、私はそつと戸口の前に立ってみました。見まわしてみても、

呼び鈴がありません。私は裏の方へでも回って見ようかと思っていると、中から朗かな子供の笑い声が聞えて来ました。(略) 少して数人の男の子と女の子とが、にこにこしながら、私の前へ来ました。私はもう自分の幼稚園へでも来たような感じがしました。(略)

ミス・マルセは私の手を握って、ほんとうに遠方から、よくまあ訪ねて来て下さいましたと、それも口数多くいわずに、もつと真実な笑顔で迎えてくれました。その心おきない態度には、人が人を迎える真率な親しみというものが満ちていました。(略) 後から思い出して見て、また何も見せてもらわないでも、この第一の印象が、この幼稚園を私の好きな幼稚園にするのに充分であったと思うのです。私は自然味のある幼稚園をもとめて来て、加うるに人間味のある幼稚園を与えられたのです。(同 pp.404 - 405)

この幼稚園は森と隣接していて、森の小径を抜けると、牧場があり、池もあり、花が一面に咲く斜面があり、また森が続く……と、やはり自然にはとても恵まれています。でも倉橋先生がここで感動したのは、むしろ、ここで「自然味」と表現されたことなのでしょう。倉橋先生が「森」という言葉にシンボライズしているのは、「不自然でない」生活、人が安心して過ごし、わざとらしくなく居心地よくいられる空間・時間でもあったのだと思います。外からは幼稚園とすぐにわからない園の佇まい、ふと現れた幼児の屈託のない笑顔、そしてミス・マルセの温かく真実の出会い……。

これを読んで思い出すのは、『幼稚園真諦』の中で先生が幼稚園について感じる、臭いという感覚です。

できるだけ幼稚園らしくない形をとらせてみたら、ほんものが出て来はしないかとさえ試みているのです。(略) 生活には特別の臭味はないが、幼稚園へ入れられると幼稚園臭くなるのです。(同第一巻 p23)

西欧社会において、「自然」は人間の理性、社会などと対立する概念ですが、倉橋先生は、幼児から成人へと人間が発達しても、それぞれの時期に自然と人間が調和を図り、一人ひとりが居心地よくいられる社会を実現することを目指していたのではないのでしょうか。

「森」と人間の調和

ドナー・グローブ幼稚園が、小学校一、二年までの幼小接続教育の実践を「いかにも自然に、かつ徹底的に」行っていることにも先生は注目しています。でも、先生はその教育環境に最も打たれ、目を見張っていらしたのではないのでしょうか。普通の住宅のような建物であるのに、中は、階段や廊下で段差をうまく活用し、幼稚園と初等科が滑らかにつながっている間取り、インテリアや調度品の質や色合い、掛かっている絵、生けられている花と花瓶……のすべてが、「いかにも、おっとり落ちついて」いること。八角の広い遊戯室が中央にあり、放射状に数個の小さい部屋があるという設計は、先生が思い描いた考えと共通だったんですね。その偶然を前に、先生がどれほど驚き感動されていたことか……。また、日本の障子に似た趣の深い棧のあるガラス戸、その陽だまりの中で、人形の着物にアイロンを掛けていた女の子の後ろ姿が深く刻まれたんですね。

刻々と感動で胸が膨らみ、その一つの頂点は、ミス・マルセの書棚にヘンリー・ソー（先生はトローと書いています）の四季日記集があるのを見つけたときでした。――続く――